

## ‘The Village Minstrel’ におけるルービン像とクレア

鈴木蓮一

(1)

クレアの初期の重要な作品の一つに数えられる詩 ‘The Village Minstrel’ (以下 VMと略す) は1821年に詩集 *The Village Minstrel and other Poems* の巻頭を飾るスペンサー連で書かれた長編詩として公刊された。John Barrellはこの詩を「クレアの自叙伝詩」(“his autobiographical poem”)<sup>1</sup> と呼び、Mark Storeyはこの詩が「自叙伝的かつ回顧的であるが、最初の詩集を出版しようとする者の不安や自信のない自己正当化を反映している」<sup>2</sup> という。また Johanne Clareは、‘Autobiography’ と同様VMにおいてもクレアの実験のある面が回避されているということから、この詩を「自叙伝の伝統のというよりは、Romantic narrative の伝の伝統のなかに置くのが批評的にはより正確であろう」<sup>3</sup> というけれども、この詩のヒーローである田舎の青年、ルービン (Lubin) についての叙述のなかに「自分の境遇がもつ種々の障害を受け入れ、それらと闘っている修業中の一詩人」(“a poet in the making, living with and fighting against the limitation of his situations”)<sup>4</sup> の姿が、いわばクレア自身の分身とでもいうべき人間像が読みとれることを認めているように思われる。J. M. Toddはこの詩に「クレアの初期の自己、彼の生活、彼の社会についての考え」<sup>5</sup> が表れているとみなしているし、*The Early Poems of John Clare 1804-1822* (Oxford English Texts) の序文で、E. RobinsonとD. Powellはこの詩を「特筆に値する詩」(“a remarkable poem”) と評価し、そこには「自叙伝的底流」(“autobiographical undertones”)<sup>6</sup> があることを明言している。W. J. Keithがいうように「ルービンはクレアである、しかしクレア自身によって観察されたクレア的人物である」(“Lubin is Clare, but a Clare observed by himself”)<sup>7</sup> ならば、村社会の「内側からの傍観者」であるルービンという人物像の形成にクレアが自然、社会、文化に対する自らの反応を織り込んでいくことには疑問の余地はない。先ずこのルービン像における自叙伝的要素を手掛りに彼の性格付けがいか様になされているかを、この詩のキーワードである “joy”・“fancy”・“artless” の特徴的意味を闡明することに重点を置きながら、跡づけたいと思う。そうすることによって、詩・自然・文化・社会・民衆についてのこの時期におけるクレアの意識や感情、また固まりつつあった思想が見え隠れした断片的な状態ではあっても、より理解しやすいものとなるであろう。1821年9月に出版されたVMは、編者兼出版者であったJohn Taylorがいくつかの理由によって‘The Peasant Poet’ という原題を変更したのをはじめ、クレアの直筆原稿に大幅な削除や文体及びスペリングの修正を施したものであった。1819年の11月には約100スタンザがすでに書き上げられ、翌年の1月 *Poems Descriptive of Rural Life and Scenery* が出版された後、間もなく完成された。<sup>8</sup> クレアがこの詩の吹き映えに当時少なからず不満を抱いていたことが ‘Autobiographical Fragments’ に記述されている。

the encouragment my first Volume met with lifted me up into heartsome feelings and ryhming was continually with me night and day I began the Village Minstrel a long while before attempting to describe my own feelings and love for rural objects and I then began in good earnest with it after the trial of my first poems was made and compleated it was little time but I was still unsatisfied with it and am now and often feel sorry that I did not withold it a little longer for revision the reason why I dislike it is that it does not describe the feelings of a ryhming peasant strongly or localy enough I began a second part to effect this and got a good way in it and sent Taylor a specimen but he said nothing in return either for it or against it and as I found the verses multiplied very fast and my intended correction of localitys growing very slow I left off and destroyd a good part of it the rest remains as they were — all the poems in the Village Minstrel save the early ones above mentioned were written after the publication of the first Vol and a many more unpublished yet most of the Poems now written were written in the three years preceding the first publication<sup>9</sup>

クレアはこの詩のヒーローである「詩を書く農夫」即ちルービンの「感情」を「十分力強く、あるいは場所の特色を出して」叙述することに失敗しているというのが不満の理由である。換言すれば、クレアがルービンの姿を借りて「自分自身の感情や田舎の自然の事物への愛情」をうまく表現することができなかったというのである。引用文中の「二番目の部分」(“a second part”)は other poems の一部を指していると思われるが、ここでVMの失敗を補おうとするが結局これもうまくいかなかった。近年までわれわれが読むことができたVMは、1821年詩集の title-poem と1935年出版の J. W. Tibble編 *The Poems of John Clare* (London:Dent & Sons, 1935) 所収のものしかなく、両者は共に先述の如く、Taylorの手が加えられたものであった。しかし、クレア没後実に125年目の1989年、*The Early Poems of John Clare 1804-1822*において初めてVMの全体が自筆原稿そのままの形で上げにされた。1989年のこのOxford English Texts版によって完全なテキストとしてようやく権威づけられたこの詩を読みながら、本稿ではクレアの初期の詩がもつ特質とその思想の解明を試みたい。

## (2)

VM は詩をうたう農業労働者の青年ルービンを概説する形で始っている。

While learned genius rush to bold extreemes  
 & sun beams snatch to light the muses fires  
 A humble rustic hums his lowly dreams  
 Far in the swail where poverty retires  
 & sings what nature & what truth inspires  
 The charms that rise from rural scenery  
 Which he in pastures & in woods admires

The sports the feelings of his infancy  
& such like artless things how mean so ere they be (1)<sup>10</sup>

最初の二行で、教育を受けた詩人の詩作が「大胆に極端な表現に走る」のとは対照的に「身分の低い田舎者」は無教育であるが、独学し、貧しい農村で「平凡な夢」を口づさみ、「《自然》と《真実》が靈感によって与えるもの」をうたうという。1行目の“learned”と“genius”は何か矛盾する内容をもつ語であろう。前者は学問、学識、教育のあることを含意するが、後者は後天的なものとは無縁な、天与の才能を指しているからである。教育と詩人の関係についてクレアは「教育のことですが、それは詩を書くのにほとんど助けになりません」(“As to education, it aids very little in bringing forth that which is poetry.”<sup>11</sup>)という。

この“truth”という語はルービンにとって非常に大きな意味をもっている。というのは彼の想像力が、《真実》を必須の要件にするリアリズムと関係していて、ロマン派の詩の特徴であるセンチメンタリズムに抵抗する詩風を醸成するからである。また最終行の“artless things”のartlessとは何ういう意味であろうか。それは「洗練・上品・教養 (refinement) の無い」という表向きの意味をもつが、artifice・cunning・deviceが無いというコノティションがある。また“lowly dreams”とは何ういう夢であろうか。“lowly”は「儉しい、平凡な」という意味で用いられているが、「身分の低い」というコノティションがあり、そこにはクレア自らの社会的地位の低さの自覚と階級意識が潜んでいる。1スタンザをこのように一瞥しただけでもルービンの特異さが垣間見られる。そこで、さらに彼の詩人への道を、精神の有り様という観点から、クロノジカルに詳しく見ていくことにする。

少年ルービンの精神生活において「喜び」(“joy”)に勝るものはなかったが、「子供がしたがるいたづら」(“childhoods tempting tricks” 5) や「かくれんぼ」(“‘I spy’ haloo”)、「おはじき」(“marble ring”)、「独楽廻し」(“spinning top”)といった楽しみや遊びはルービンの「喜び」ではなかった。

Their (boys’) sports their pastimes all their pleasing toys  
We leave unsung — tho much such rural play  
Woud suit the theme — yet theyre no lubins joys  
Truth breaths the song in lubins steps to stray  
Thro woods & fields & plains his solitary way (6)

ルービンはあそび仲間からはずれ、ひとり「喜び」を求めて自然の中に入っていく。

Wi other boys he little card to mix  
Joy left him lonely in his awthorn bowers  
As haply binding up his notts of flowers  
Or list’ning unseen birds to hear em sing  
Or gazing down ward where the runnel pours  
Thro the mossd brig\* in many a wirling ring  
How woud he muse oer all on pleasures fairy wing (5) \*bridge

サンザシの花を摘んだり、鳥の歌を聞いたり、苔むした橋の上から渦巻く細流を眺めては「《楽しみ》という妖精の翼に乗って」瞑想に耽った。《自然》の中にこの上ない「喜び」を見出したルービンはそれを詩にうたわざるをえなかった。《自然》は彼にとって「楽しい書物」であり、地上楽園である。村の仲間から離れていくルービンの傾向は、彼にとっても貴重なものであり、古くからの伝統的文化であった「五月祭の田舎の楽しみ」(“the rural sports of may”)が農夫達によって復活されるのを見ては喜ぶけれども、彼らの祝宴の大騒ぎは下品で、粗野であるとしてこれに参加したがるらないという2行、“He lov'd ‘old sports’ by them (the humble tenants) reviv'd to see / But never card to join their rude revellry” (21)にも窺われる。

Nature lookd on him wi a witching eye  
 Her pleasing scenes was his delightful book  
 Where he while other louts gaumd\* heedless bye  
 Wi wild enthusi[a]sm us'd to look  
 The king cup vale the gravel paved brook  
 Was paradise wi him to muse among  
 & haply sheltering in some lonley nook  
 Woud sit him down to see it purl along  
 & fird wi what he saw hum oer full many a song (7) \*stare idly or vacantly, gape

「自然が魅惑的なまなざしでルービンを眺めた」という一行は注目すべきである。ルービンではなくて、《自然》が主体なのだ。7スタンザの最後の行における「眼に映った(自然の)事物によって靈感を与えられて」という詩句でも、彼は《自然》からの働きかけを受ける客体として描かれる。このように《自然》が主体でルービンを客体という表現形式は17スタンザでは、《自然》ではなく《時》が主体となっている異形ではあるけれど、彼が客体であることには変りはない。

O who can speak his joys when springs young morn  
 From wood & pasture opend on his view  
 When tender green buds blush upon the thorn  
 & the first primrose dips its leaves in dew  
 Each varied charm how joyd woud he pursue  
 Oer yellow furze clad heath & val[e] & lawn  
 Tempted to trace their beautys thro the day  
 Grey girdl'd eve & rosey wreathed morn  
 Have both beheld him on his lonley way  
 Far far remote from boys & their unpleasing play (17)

春の日の黎明がルービンの眼に森や牧草地の緑の美しさを照らし出す。彼は「喜んで」(“joyd”) (joyは to convert into joy, OEDの意である) 自然の様々な魅力をすべて追求し、自然美を一日中探求するべく「誘惑されて」いる。さらに「灰色の帯を付けた夕辺やバラ色の花輪で飾られた朝が / 共に独りさ迷う彼を見守っていた」という詩行においてもルービンは受身である。彼は自発的に、

能動的に自然美を享受した様には描かれていない。このことは、ルービンが属する農業労働者という階級の低さゆえに教育が無く (uneducated であること)、従って教養が無い (彼を形容する “artless” と “rude” は illiterate をも意味する) という理由で自然美を享受したり、詩を書く資格を生まれながらにして剥奪されているという自意識のあらわれではないのか。そうであるならば、18世紀末においては貧しい者が自分達の利益のために何か書くべき内容をもととすることは気が狂った、もしくは有害な考えであるとみなされたように<sup>12</sup>、日雇い労働者のような下層階級の人々が詩作することは社会通念上許されなかった社会背景がここに反映されていると思われる。ルービンが詩作することはおろか、自然と人間の関係を思索し、それを一つの大系として構築するようなことも到底社会が容認しなかった。だから、少なくともこの詩の前半部において、クレアは主体を《自然》の側に置き、常にルービンを自律的な精神作用をもたない、受動的・消極的な人物として描くことによって、自然美に感動し、詩作するという厚かましさを社会的制裁から、換言すれば、社会と文化を支配しているロンドンを中心とする上流階級からの指弾から彼を免れさせようと意図しているようだ。田舎の貧しい労働者達の精神と行為の習慣及び価値について無知であり、それらに対して敵意を抱いている主にロンドンの人々、それも上流階級の人々から成る読者層に向けて自分が詩を書いていることをクレアは意識していた。<sup>13</sup> こういう作者の配慮があったので、ルービンは「多くの詩を何度も繰り返し小声でうたう」 (“(He) would ... hum oer full many a song” イタリックは筆者) ことができたのである。人目を憚り、控え目にぶつぶつと小声でうたうのである。Johanne Clareは、作者がVMにおいて「自分自身の中に詩の能力が在ることを断言することによってプライドやずうずうしさを告発される危険を冒すよりも、《自然》に内在する詩的性質を強調している」<sup>14</sup> と指摘しているが、この「《自然》に内在する詩的性質」という屈折した概念は、《自然》が主体でルービンが客体という表現形式と軌を一にするものである。

こういう階級意識ゆえに、次に引用する詩行において、「身分卑しい天才」 (“low genius”) であると自覚するルービンが自己の今の有り様を省み、前途を予想し、それを「名もなく、人知れず」咲く野の花に喩えているようでもある。

Wild blossoms creeping in the grass to view  
 Scarce peeping up the tiney bent as high  
 Betingd wi glossy yellow red or blue  
 Unnamd unnoticed but by lubins eye  
 That like low genius sprang to bloom their day & dye (22)

この「身分卑しい天才」は、経済的理由から教養のない者であらざるをえなかったが、それに抵抗するかのごとく、「自然児」 (“natures child”) として、しかも次第に詩作の自信がつくにつれ、「深い瞑想に浸って」 (“in contemplation deep” 45) 自然の事物を凝視する性格が<sup>45</sup>スタンザで与えられている。

人知れぬ密やかな自然の場所がルービンの喜びであり、「森や人気のない野原の至る所、《自然》はしばしば彼を導いた」 (“Him woud she (nature) lead thro & lonely plain”) という詩句のある18スタンザでは冬中啼かなかったツグミの歌を久し振りに聞き、「彼はその調べを美しいと感じ、それを何度も真似るのであった。」 (“He thought it (the thrush’s strain) sweet & mockt it oer again” 24) またそうしながら、同時にキバナクリンソウを摘み、賛美し、「洗練されていないソネッ

ト] (“rude sonnets”) を試みるが、その際「自然の素朴な存在が技巧という助けを与えた。」 (“natures simple way the aid of art supplyd”) 《自然》の中にこそ、ツグミの調べや花の中にこそ「技巧」があるので、「技巧を知らない少年」 (“artless boy” 112) 即ち学問のないルービンは《自然》を模倣することによって、そこから“art”を修得しようとする。“art”は人間の中にあると考えるのが普通である。ルービンの精神的態度には、《自然》自体を客体としてしか扱わず、想像力の働きによって自らの精神を表象する手段としてのみ《自然》を利用する他のロマン派の詩人たちに対するクレアの不満が感じられる。要するに想像力という精神作用が《自然》に介入・干渉することを否定するのがクレアの考えではないのか。J. Sychravaはクレアとワーズワスを比較し、クレアが人工 (art) の自然に対する優位と干渉の重要性を否定し、自然を人工の中に取り入れることを故意に避け、<sup>15</sup> ワーズワスのセンチメンタリズムへの抵抗<sup>16</sup>として、「形を与えたり、または再編することなしに風景と場所の豊かさや直接性を伝える」、自然の「無秩序の美学」 (“aesthetic of disorder”)<sup>17</sup> を確信していたと論じている。

ルービンは自然美や「村の楽しみ」 (“village merriments”<sup>96</sup>) を喜んだこととは別な「喜び」のイメージがある。

Twas pleasing too when meadows browning swath  
 Neath sultry sunbeams witherd on the lea  
 To mark the ploughboys at their sunday bath  
 When leisure left em at their wading free  
 In some clear pit hemd round wi willow tree (46)

この一節で注目すべき語は“leisure”と“free”である。“ploughboy”とは「田舎の労働者階級の男子」 (“a boy of the rustic labouring class” OED) であり、文字通り牛馬を率いて犁で耕す仕事をする。うだる夏の日曜日、柳に縁取られたきれいな池で彼らが水遊びをしている。“leisure”は少年らが余儀なくされた「重労働」 (“toil”) を、また“free”は彼らの精神と行動を拘束していた「貧窮」 (“want”) を読者に想起させる。まさにこういう解放感・自由感が彼に喜びを与える。“leisure”や“free”という語は、「労働」 (“labour”)・「休息」 (“rest”)・「思いのままに」 (“at will”) という語(句) を含む26スタンザの印象的イメージを連想させる。

With contemplations stores his mind to fill  
 O doubly happy woud he roam as then  
 As the blue eve crept deeper round the hill  
 While the coy rabbit venturd from his den  
 & weary labour sought its rest agen  
 Lone wanderings led him haply by the stream  
 Where unperciev'd he joyd his hours at will  
 Musing the cricket twittering oer its dream  
 Or watching oer the brook the moon lights da[n]cing beam (26)

丘の辺りに夕暮がしのび寄る時、内気なウサギが勇気を出して巣穴から出てくる。疲れきった労働

者が一日の農作業を終え、家路につく。昼間の危険な状況からの解放、巢穴即ち「住処」の確保、生命の安全、重労働からの解放、我家での休息といった条件がルービンを二倍も楽しませる。彼自身も独りさまよい、暫く思いのままに楽しむ。また“weary labour”・“rest”・“at will”という語(句)は、クレアの他のキーワードである“industry”・“toil”・“self-interest”という語と対比的であり、クレアが当時の労働者たちの状態を憂え、経済的商業的繁栄を優先させる社会風潮を批判しているように思われる。「多くの勤労が貧困に備えて粘り強く続いた」(“Much industry gen (against) want did persevere” 38)という詩句において感じられるように、「勤労」は「重労働」と同様、自らの生活を困窮から守るためにするべきものであり、「利己心」は「衆人の公平な同感に基づき」、社会正義の限界内で発揮されるべきであるとクレアは考えていたであろう。<sup>18</sup>「先輩達より申し分のないブルジョア的モラリスト」であったワーズワスにとって、「重労働」(“hard work”)や「勤労」が彼の牧歌の本質的要素であり、労働そのものが彼の自然調和の観念によって労働者達の「ほどよく性分に合った」(“properly congenial”)ものとされ、「労働の骨の折れる性質」(“the arduous nature of work”)も荒々しく、困難な地勢と自然調和しているという観念に訴えることによって承認され、正当化されているのに反し、<sup>19</sup>クレアは平等主義的社会観に基づき、貧窮に陥った人間存在としての労働者に同情し、その重労働の不当性に抗議している。“toil”については、冬支度をするリスの暗示的イメージを見るべきである。

& he could tell as how the squirrel far'd  
 Who often stood its busy toils to see  
 How he gen\* winters wants were well prepar'd  
 Wi many a store in hollow root or tree  
 As if bin told how winters wants would be  
 Its nuts & acorns he would often find  
 & hips & haws too heaped plentifully  
 In snug warm corner that broke off the wind  
 Wi leafy nest made nigh that warm green mosses lind (67) \*against

リスの冬支度の“toil”は生き残りのためになされるものだが、農業労働者の“toil”は少なからず雇用者によって搾取され、低賃金で長時間労働を強要される当時の条件を暗示する。また豊富に貯えられた木の実やドングリ等の食べ物と「居心地よい、暖かい片隅」に作られた巢のイメージは貧窮する労働者の粗末な寒々とした田舎屋(cottage)を暗示する。

ウサギと労働者が、即ち nonhuman life と人間が同じレベルでうたわれていることは、主観主義、客観主義、超越主義を離れた、「すべての生命体への人間味のある関心」(“a humane interest in all life”)<sup>20</sup>の表われであり、ウサギの生息環境とその運命は農業労働者のものと本質的にはほぼ同じではないかという直感が作者の脳裡をかすめたと思われる。それは、ウサギも労働者も共に《住処》を奪われかねない、また外からの危険な物に侵され易い、不安定な状況下にあったからであろう。Keithは、VMが成功している点の一つに、「リスと水夫が対等の条件で見られる事態(situation)をクレアが創造することができたという事実」<sup>21</sup>を挙げている。

この上なく楽しい気分させる光景を目の当りにして、ルービンの「感受性の高まった心」(“feeling mind”23)には詩想が湧き、詩作を試るが、その過程はこう語られる。

& here the rural muse might aptly say  
 As sober even sweetly siles\* along  
 As how she chasd black ignorance away  
 & warmd his artless soul wi' feelings strong  
 To teach his reed to warble forth a song  
 As how it echod on the even gale  
 All by the brook the pasture flowers among  
 But ah such trifles are of no avail  
 Theres few to notice him or hear his simple tale (27) \*glide, fleet past

田園詩神は詩作についての、不幸をもたらす無知をルービンから追い払い、彼の「技巧を知らない心」に強烈な感情を引き起し、詩のうたい方を教えるという。これは、《自然の霊》または《土地の霊》と呼ぶべき田園詩神が無学の (artless) 彼に学問 (art) を教えるということをやめかしているようでもある。田園詩神についてのクレアのこのような概念は、詩は学識、「神話などの装飾」、<sup>22</sup>「流行の文体」でも、またロンドン風の趣味、上流階級の思想でもないという信念とも無関係ではない。無教育で、洗練された文化 (literate culture) に携わる資格もないルービンに詩を書く希望を与える田園詩神は彼の詩人願望の支えであり、《守護霊》としても存在している。

## (3)

ルービンは詩人願望を捨てきれず、田園詩神に守られ、詩作を始める。彼は「教育のある詩人の努力がその報酬として受け取るもの」とは無縁であり、「野望を抱くことなく」名声も求めない。「不運な田舎者」(“a luckless clown”) に対する村人達の意地の悪い、冷たい態度<sup>23</sup>、経済的、精神的自由を束縛された生活条件、余儀なくされた重労働は彼の詩想即ち「想像力」(“fancy”)<sup>24</sup> の作用を抑圧し、彼を運命の意志に従わせようとする。<sup>25</sup> 労苦やいわば「奴隷状態」がなければ、彼の想像力は喜んで飛翔し、稚拙であろうとも詩作しようとする。想像力の作用は、ルービンの場合も回願的である。回想される過去の風景美を彼は書留めることを禁じえない。

Fancy beholds & quickens at the sight\*  
 & thro the thorns wants in her passage fling  
 Oer the bent head she limps her lowly flight  
 Groups\*\* thro obscuritys dark vale & struggles for the light (3) \*retrospection's  
 sight \*\*gropes

現実の束縛によって作用が不活発にされる想像力は、回想された光景のイメージを見て、活気づき、困窮生活の中から飛び出す。そして貧困ゆえに「うつむいた顔」の上を低く、のろのろと飛び、無名という暗い谷間の中を手探りで進み、光明を求めて奮闘する。言い換えれば、貧窮に打ちのめされ、項垂れた心境に拘束されながらも、想像力は回想のイメージによって刺激され、何とか押し潰されずにその翼で天駆けようとする。



‘The Village Minstrel’ におけるルービン像とクレア

Thus lubins early days did rugged roll  
 & mixt in timley toil—but een as now  
 Ambitions prospects fird his little soul  
 & fancy soard & sung bove povertys controul (4)

ルービンの少年時代は貧困ゆえに「教養や洗練を欠いた状態で」(“rugged”)、時節に合わせて行われる農作業に雇われ、働きながら過ぎていく。彼は「生まれながらの農夫」(“a peasant from his birth” 4)であり、穀竿で脱穀したり、耕したり、家畜の世話をしたりして生活の糧を得た。だがそういう時でも、彼は詩人願望の抱負に胸をふくらませ、想像力は「貧困の支配」を克服し、飛翔し、うたう。2スタンザで彼は“unambitious”であったが、詩作への自信が増すにつれ、“ambition”を抱くようになる。

さて、“fancy”の作用とはルービンの場合どういふものなのか、これを次に見ていきたい。その最も初期の作用は子供の想像力におけるものである。自然の中に住み、迷信として生き残っている妖精たちの話が、それを炉辺で聞き入る子供達の心の中に引き起す驚異の念や恐怖心などは“fancy”の作用の所産である。妖精についての話がルービンの心に深く印象づけられる様子はこうである。

On lubins mind oft deeply they (fairies) imprest  
 Oft fear forbid to share his neighbours mirth  
 & long each tale by fancy newly drest  
 Brought faireys in his dreams & broke his infant rest (14)

彼が聞いたお伽話は「想像力によって装いを新たにされ」、夢にまで妖精達が現われ、彼の眠りを妨げる。また想像力が産む恐怖心が彼の心を占有するため、友達と一緒に笑い、陽気に遊ぶこともできない。「想像力は彼の視界に恐しい怪物を形造った」(“Dread monsters fancy moulded on his sight” 15)と「子供時代の想像された恐怖心」(“childhoods fancyd fear” 15)という詩句に明らかのように、“fancy”の働きはイメージの創造<sup>28</sup>と情緒の惹起であった。また「民話」の創作にみられるように想像力は個人のみならずコミュニティの集団としての精神の広がりの中でも発揮される。民衆の想像力が創造した《物語》(“stories”)・《民話》(“tales”)・《バラッド》(“ballad”)・《歌》(“song”)が構成する、廃れつつあった「個人的でない、集合的な」(“collective, not individualistic”)<sup>29</sup>口承文化(oral culture)の意義をクレアは十分認識していたことは言うまでもない。しかしながら詩人を願望するルービンはoral cultureとは異質の、文学的で教育ある(literal)、そして個人的な文書文化(textual culture)である先輩詩人達の作品に親しむ。こういう経験は隣人の村人たちの知らないことであり、この点でもルービンは「隠遁者」(“solitaire”)であった。<sup>30</sup>

次にルービンの“fancy”の別の大きな特徴、即ち“truth”の探究心の発露である、事実を重視する要素に目を向けてみよう。彼は「自然の秘密」(“natures secrets”)についての知識を求めて、「飽くことを知らない眼」(“unwearied eye”)で季節の移ろいとともによりゆく自然の美しさを、春の野の花、昆虫、鳥、彩られた夏空、秋のそよ風、冬の悲しげに吹く風を「注視」(“watch” 68)した。その結果、「彼は自然の多様な存在を知っていた/それらは識別力のない眼には常に秘密のままである。」(“& many a way of nature he could tell/that still are secrets to un’scerning eyes” 66)例えば、「蜜蜂が極めて用心深く蜜房を閉じる」様子、野ネズミが巣穴に麦の穂を貯える

様子についての知識を彼はもっていた。自然、殊に生き物の生態についての熟知は彼の“fancy”がセンチメンタリズムあるいは主観主義に陥ることを妨げている。クレアへのTaylorの「自然からのイメージは特別な感情 (a particular Sentiment) によって呼び出されるべきだ」とか「主要な思想であるべきものを、叙述がその上に横たわり、窒息させた」(“the Description overlaid and stifled that which ought to be the prevailing Idea”)<sup>29</sup> という「上品な批評」(“polite criticism”) に対し、クレアは一般民衆が是認する批評、即ち彼のいう、“the criticism of my father and mother and several rustic neighbours”<sup>30</sup> でもってこれを拒否しようとする。ルービンの“un’s-cerning eyes”ならぬ“discerning eyes”が重要視されている。田舎の風景描写及び詩のテーマと「識別力のある眼」との関係はクレアにとって見過ごすことのできない問題であることがこう述べられる。

As rural landscapes destitute of trees  
 Woud doubtlessly be fancied painted wrong  
 & lowly rural subjects such as these\*  
 Must have its simple ways & feats diserning eyes to pleas[e] (81) \*statute, village  
 feast

樹木のない田舎の風景が描かれたならば、それは真実または事実から外れて想像されていることは確かである。それと同様、村祭りや縁日のような田舎の「庶民的な」テーマが、見る眼をもった者を満足させる、「素朴な方法」と「妙技」をもっているに違いないという。ルービンの“fancy”はこういうリアリズム<sup>31</sup> を前提条件としている。クレアの場合、知識への欲求は‘Natural History Letter’・‘Bird List’・‘The Journal’・‘Notes’として結実している。《自然》と《小さな生き物たち》(“little things”) についての知識をクレアほど吸収しようとしたロマン派の詩人が他にいたであろうか。また彼ほど nonhuman life とその価値を、人間精神の中に取り込まないで、それ自体の中に求め、認めようとした詩人が他にいたであろうか。

## (4)

さてルービンの“fancy”のもう一つの大きな特徴は、それが「民衆の世界」を志向し、その文化を尊重していることである。30~34スタンザに相当する「貧民に同情してのルービンの嘆き」(“Lubins sigh For the Pauper”) と題された「一人の貧しい男」の挿話には、当時の下層社会における庶民の生き様が凝縮されている。若い頃は健康に恵まれ、農業労働者として体力を誇り、楽しい日々を送っていた男がその後不幸に見舞われ、今は不具者となっている。「老齡」(“age”)・「悲しみ」(“woe”)・「困窮」(“want”) が一つになってこの男を墜落させ、ついに彼は教区の救貧院の世話になる。この話の最後のスタンザは当時の労働者の一般的境遇を呈示していると思われる。

When labour scarce its barley crust supplies  
 Worn to its latest feeblest thread like mine  
 When forcfull want on brutish aid relys

## ‘The Village Minstrel’ におけるルービン像とクレア

(O loath were I my labour to resign)  
 When far worse pains I meet then\* pain to pine  
 When tottering limbs by age & toil brought down  
 No pity meets—O may nor thee nor thine  
 Know the sad anguish of a parish frown  
 To be like me lost wretch beholden to a town\*\* \*than \*\*village

労働の報酬は僅かな食べ物も買うことができないほど少ないけれども、労働者は疲れて体がポロポロになるまで働かざるをえなかった。《貧窮》が情容赦なく彼を襲い、ついに「残酷な援助」即ち村の救貧院の「恩義を受けて」悲しい日々を送るとき、彼に哀れみの言葉さえかける者は誰もいない。一人一人が利己心に囚われているからである。それではルービンはこういう労働者に対して何う反応しているかを見てみよう。

As most of natures children prove to be  
 His (Lubin's) little soul was easy made to smart  
 His tear was quickly born to sympathy  
 & soon was roused the feelings of his heart  
 In others woes & wants to bear a part  
 Yon parish huts where want is shuud to dye  
 He never viewd em but his tear woud start  
 He past not by the doors wi out a sigh  
 & felt but every woe of workhouse misery (35)

利己心を知らない「自然児」としてのルービンは、救貧院の世話になっているこの哀れな老人の話の聞くとすぐに小さな胸を痛み、《同情》あるいは《共感》(“sympathy”)を抱き、涙を流す。この sympathy という語は老人の話の最後のスタンザに出てくる“pity”という語と共に、当時の人間の心の有り様と社会状況を、さらにルービンのそれらに対する反応を端的に表わしていて興味深い。pity は憐憫の情であって、不幸な人に対して哀れだと思ふ気持である。これは自分がその人のように不幸ではなくてよかったという気持が心の底のどこかにある、自己中心的な心の有り様を含蓄することばであろう。だとすれば、同じスタンザの、この老人が「どんな哀れみのことばさえもかけられなかった」(“No pity meets”)という詩句は、他人の不幸を共有しようとする気持を表わす“sympathy”よりも倫理的には低劣な憐憫の情さえも隣人達が持ち合せていないような社会状況を強調していると考えられる。過度の利己心に囚われた村人達は、「洗練された喜びを求め、詩の女神の魅力的な微笑を得ようと努める」(“seek refined joy & court the 'chanting smiles of poesy”)「審美的態度」(“taste”)をとるルービンに呆れ、彼が将来いかなる人物になるだろうかと訝がる。彼を取り巻く村人達はこう描かれる。

Bred in a village full of strife & noise  
 Old senseless gossips & blackguarding boys  
 Ploughmen & threshers whose discourses led

To nothing more then\* labours rude employs  
 'Bout work being slack & rise & fall of bread  
 & who were like to dye ere while & who were like to wed (40) \*than

ここでは分別のないおしゃべり女、下司な若者、耕夫、脱穀人夫といった人々が村人達の例として挙げられているが、彼らの話題は「労働者の過酷な雇用条件」、「仕事が少ないこと」、「パンの価格の上がり下がり」、「直に誰が死にそうで、誰が結婚しそうだ」というような、ルービンの“taste”とは対照的な、「洗練されていない」(“rude”)ものばかりである。彼らを形容する“senseless”・“blackguarding”、彼らの仕事を形容する“rude”、また村の現実を示す“strife and noise”はルービンが求める“refined joys”・“(en)chanting smiles of poesy”の世界から何んとかけ離れていることか。貧しくて、教育もなく、少年時代から労働を強いられたルービンは、余暇を読書と詩作で過ごした。自作の詩を朗読しても誰も聞いてくれる仲間のいない農村社会は、ルービンにとって正しく「クルーソーの孤独な島」(“crusoes lonely isle” 39)であった。教会の日曜礼拝の際の中でさえ、村人達の頭の中は「成育しつつある麦の作柄予想」(“prospects good or bad in growing grain” 42)のことでいっぱいである。換言すれば、彼らの心は物質的経済的なもので占められ、自然美・文学・美術・宗教・学問のことなどには関心がない。こういった分野の読書をし、特に博物学や詩文学についての並々ならぬ知識をもっていたルービンではあるが、村人達の中に交じって生活するためにはやむなく無知を装わねばならない。「彼ほど無知を装っている奇態で粗野な田舎者はほとんど見られなかった」(“A more uncoothly lout was hardly seen/Beneath the shroud of ignorance then (than) he” 43) そのため彼は村人達の嘲笑的となっている。おしゃべり女達は彼のことを予言し、繰り返しこういう。

How half a ninney he was like to be  
 To go so soodling\* up & down the street  
 & shun the playing boys when ere they chanced to meet (43) \*lingering

ルービンを馬鹿にし、物笑いの種にする村人達ではあるが、彼は村祭りや収穫の祝祭などで行われる「粉に覆われた粉屋」(“dusty miller”)とか「スコットランド人の呼売り商人」(“scotch pedlar”)といった「下品な笑劇」(“rude farce”)を彼らと一緒に見て楽しむ。「(ルービンは)陽気に騒ぐことも心配することも村の品がない庶民達と共にした」(“& (Lubin) joind his mirth & fears with low vulgar crew” 62)とあるように、tasteの違いゆえに村人達から時々離れることはあっても、ルービンは彼らの一人である。彼は彼の属する階層の人々が築いた文化を尊重する。それは特にバラッド・古歌・民話・物語などの昔から受け継がれてきた民衆文化への愛着となって現われる。産業主義・ロンドン中心の都市文化・上流階級の意向や好みを反映した「洗練された文化」(the polite culture)・民衆の集合的意識よりもエリートである個人の意識を尊重する、商業主義に乗せられた文学趣味・中産階級的センチメンタリズム・主観主義等に対立する反体制的文化としての民衆文化なのである。民衆文化がこれらに対立するのは、これらが示す傾向こそがルービンの住む「村の社会的かつ文化的原動力 (dynamics) を破壊した」<sup>22</sup> からに他ならない。「ルービンの個人的想像力はコミュニティの伝統がある想像的生活の中で形成されている」(“his individual imagination is shaped within imaginative life of communal tradition”)<sup>23</sup> といわれるように、ルービン

の「詩的想像力」(“fancy”)は先述の口承文化によって形成されたものである。このことは彼の詩にその特色として、バラッドや歌から覚えた「リズムや音楽性」<sup>34</sup>をもたせることになる。

牧夫のうたうロビン・フッドやリトル・ジョンの手柄についての古歌、農夫がうたう「ペギー・バンド」、「五月という素敵な月」(“sweet month of may”)といった「古臭いバラッド」(“threadbare ballad”)を聞いて喜んだ。また物語については、先に触れた妖精の話、首のない怪物が現われたり、「失恋したルース嬢が殺された十字路の上を棺衣が飛ぶ」といった「沢山の恐ろしい場所」の話、また88行から成る挿話「ウッドクロフト城一牛飼いの話」、力もちの英雄トム・ヒカスリフト、自分を愛してくれる青年を「傲慢かつ片意地な女性の思い上り」ゆえに失意させ、死に追いやる「残忍なバーバラ・アレン」、「巨人をやっつけたジャック」、シンデレラ、トム・サムなどの話もよく聞いた。ルービンが民衆文化の中で育ち、<sup>35</sup> 民衆と共に生きていることは、「過去の喜び」(“past joy” 119)と不可分の「大切な場所」(“dear spot” 118)となった「生まれ育った場所」(“native place” 118)への村人達の愛着の強さを叙述しているいくつかのスタンザを読めばよく理解される。生垣人足、羊飼いの、兵士、脱穀人夫などが「生まれ育った場所」に対して抱く感情はルービンのそれと同じであり、彼らも亦記憶を辿り、楽しかった昔日を回想し、「払いのけられた思い」(“banished thoughts” 118)や喜びを追い求める。ここではその例として、重労働に疲れた脱穀人夫の場合を見てみよう。

The toil worn thresher in his little cot  
Whose roof did shield his birth & still remains  
His dwelling place how rough so ere his lot  
His toil tho hard & small the wage he gains  
That many a child most piningly mentains  
Send him to distant scenes & better fare  
How woud his bosom yearn wi parting pains  
How woud he turn & look & linger there  
& wish een now his cot & poverty to share (120)

脱穀人夫は「より良い暮らし向き」もしくは「よりよい労働条件」を求めて、故郷の村を遠く離れた異郷の地で出稼ぎ労働をしなければならない。彼らにとって故郷の田舎家は、たとえそこで貧窮生活を余儀なくされようとも、大切なものであった。ここでも注目すべき点は「住処」(“dwelling place”)が強調されていることである。「住処」は民衆においても、nonhuman lifeにおいても、その生にとって第一義的なものであるからである。

ルービンの場合、「過去の喜び」を回顧しても昔日の「楽しかった場所」は今ではもうない。ルービンの“native place”への愛着は、旅人として特徴づけられるワーズワスの土地に対する感情と対照的であろう。Sychravaによれば、ワーズワスの自然観はプラトンの的であり、《場所》を「ざっと目を通す」(“looking through”)ことによって「自然の霊」を発見し、旅人としての自分に靈感を与えるものに興味をもったのである。<sup>36</sup> ルービンが子供時代の「楽しかった場所」(“delightful spots” 122)であった共有地を失って嘆く様子はこう描かれる。

How hed look for the green a green no more

Mourning to scenes that made him no reply  
 Save the strong accents they in memory bore  
 'Our scenes that charmd thy youth are dead to bloom no more' (122)

彼はなつかしい共有地をよく捜したものだが、共有地というものは今は一つもない。かつて共有地であった場所で嘆く彼の耳には、「子供時代お前を魅了した場所は死んでいて、もはや花を咲かせることはないのだ」という、いわば《土地の霊》の声だけが聞こえてくる。場所が死んでいるとは何うことなのか。《場所》とは、ルービンにとって太古からの、自然のままの地勢をもつと思われる土地を意味する。そういう《場所》が消滅したということなのである。125スタンザで再び“native place”へのルービンの愛着の強さが語られるが、ここでは場所の空間的変化とともに時間的変化、即ち彼の内面における成長の影響を受けた変化が意識されている。

& sky larks too their singing might pursue  
 To claim his praise—he could but only say  
 Their songs were sweet but not like those he knew  
 That charmd his native plains at early day  
 Whose equals neer was found where ere his steps might stray (125)

今美しく啼いているヒバリの歌は、子供時代に聞いたものとは違っているように思われる。このことは、《自然》との交わりによってもたらされた《喜び》の、《時間の流れ》に因る、換言すれば子供から大人への精神的成長に因る喪失感を確かに指し示している。しかしルービンにとっては、「楽しかった場所」の時間的、心理的変化に因る喪失よりも、空間的物理的喪失に直面した時の衝撃の方が遙かに大きいことは既に123スタンザで明らかになっている。

O samely naked leas so bleak so strange  
 How woud he wander oer ye to complain  
 & sigh & wish he neer had known the change  
 To see the plough share bury all the plain  
 & not a cows lip on its lap remain  
 The rush tuft gone that hid the sky larks nest  
 Ah when will may morn hear such strains again  
 The storms beats chilly on his naked breast  
 No shelter grows to shield him now no home invites to rest (123)

茂みや灌木などの野生の立木が伐採され、起伏した地形も平らにされて一様になった、草の生えた耕地がルービンの目に映る。その風景はとても寂漠としてよそよそしい感じがする。「人工を知らない」(“wild”) 自然の状態が未曾有の強力な商業精神を象徴する「囲い込み」<sup>7)</sup>によって耕地にされるという「変化」を、「鋤先が自然の野原を皆埋めつくしてしまう」のを見たことを彼は悲嘆する。“bury”という語は葬ること、死滅させることを、また“all the plain”の“all”は、たとえ彼の知っていた野原だけが埋められたとしても、ルービンの受けた衝撃と悲しみの大きさを強調する語

である。野原に咲いていたキバナクリンソウが一茎も無くなるほど変貌した。ヒバリの巣を保護するように隠していた蘭草の茂みもなくなった。激しく吹きつける冷たい風雨に曝されても、ヒバリは今は休息の場所を、「住処」を奪われている。貧しい農業労働者の家に生まれたクレア自身にも「住処」の保証はなかったし、<sup>3</sup> 彼を最も悲しませ、かつ怒らせたのは生息地の収奪の結果である「人間以外の生き物の喪失」(“the loss of nonhuman life”)<sup>3</sup> であったともいえる。このスタンザでルービンの“fancy”は“nest”・“home”・“shelter”・“hide”・“shield”・“rest”などの語が意味するものを強く意識している。「囲い込み」によってヒバリが休息の場所である“home”を奪われたのは、農業労働者が日雇いの仕事を捜しながら、故郷から遠く離れ、転々とするため、家での安らぎ、あるいは一家団欒の楽しみを奪われている状況を暗示しているように思われる。彼の“fancy”はまた次のようなことを強調しているのではないか。即ちヒバリは「囲い込み」を推進する農業革命によって、また農業労働者達は、彼らを人格をもった人間としてではなく、一つの労働力と見做すことしか知らなかった産業主義によって、両者は共にself-interestを過度に追求する支配階級の人々によって“home”を収奪されているということ。一度失われると回復が極めて困難な自然環境もある。その中に生きる人間とnonhuman lifeの生存にとって基本的条件である「住処」についてのルービンの意識には、時代を超えて我々に訴えかけてくるところがある。彼の意識には生態学的な価値判断が働いていたのではないか。因みにecologyは“dwelling place”を意味するギリシア語oikosからつくられた。<sup>4</sup> 「あ、五月の朝は（ヒバリの）美しい調べを何時再び聞くことができるだろうか」(“Ah when will may morn hear such strains again”) という一行はルービンのこの嘆きのエッセンスといえる。「囲い込み」によって破壊された自然のままの状態は回復されることはないであろうとの絶望感がこの一行に漂っている。自然と人間の関係について、彼がこのような感受性をもつことができたのは、彼の想像力が事実の探究をその特質としていたからに他ならない。「彼の愛情ある探究心は／飽きることのない眼でいつも自然の秘密の中を進んでいた」(“Twas thus his fond enquirey usd to trace / Thro natures secrets wi unweare[d] eye” 68) というような現実を直視する心的態度は他のロマン派詩人達のセンチメンタリズムと一線を画するところである。VMは「センチメンタルなものを礼賛して書かれた時に対する重要な反駁」(“an important counterstatement to the poems written in the cult of the sentimental”) の詩であるとRobinsonは考察している。<sup>4</sup> 彼らは自然界を自らの精神世界を表出する手段として用いることはあっても、<sup>5</sup> ルービンにみられるような自然界それ自体への注意深さと優しさをもってはいない。ルービンの「愛情ある探究心」は自然そのもののしくみをより多く正確に理解することが、自然界における人間の存続にとっていかに第一義的なことであるかを暗示している。自然界についての正しい認識がなかったからこそ産業革命期に入ると人間は盛んに自然界を収奪し始めた。その結果多くの美しい森や野とそこに住むnonhuman lifeが消滅した。これは人の心が、自然界の調和、生態系の調和の感覚を忘れ、人間中心主義をますます押し進めたため、nonhuman lifeの尊厳への畏敬の念をもてなかったからである。ルービンの自然自体への注意深さと優しさは、Barrellが指摘するように、未刊の形ではあってもそれが詩として現出した時、当時の上流階級の人々 (the polite) によってなされる「自然と彼らの関係」の構築の仕方が少なくとも「唯一で」も「自然で」も、また「必然的なもの」でもないことを主張する危険性を孕んだものであった。<sup>4</sup> 今日エコロジーの視点からみると、人間とnonhuman lifeの共生は非常に困難な状況にある。人間の営為による自然環境の破壊とそれに伴う生態系の破壊は、環境保護運動にも拘らず止まるところを知らない。この共生の実現には先づ自然界についての科学的知識とそれに基づく理解への情熱が大前提であることは言をまたない。ルービンの“fancy”の特質

である「自然の秘密」についての知識への情熱・探究心は、“感情的なロマン派の詩の隆盛がその頂点に達し、まさに下降せんとする時期である1821年においては余りに時代を先取りしていたため過小評価されてきたが、その今日的意義がようやく認識され始めたところである。

## (5)

自己を取り巻く社会状況と人心の変化及び「困い込み」による自然環境の変貌と nonhuman life の消滅についての現実意識、農業革命によって不安定な生活を強いられた農業労働者たちへ共感<sup>45</sup>といったものがルービンの“fancy”の働きを刺激するとき、彼の“fancy”は最も力強く、ラディカルな思想とイメージを呈示する。クレアの庇護者の一人 Lord Radstock は「詳細に知っていた社会についてのクレアの感情的でない書き方」(“Clare’s unsentimental writing about the society he knew intimately”)<sup>46</sup>をひどく嫌ったが、同時に彼の詩の中にあるラディカルなものに気づいていた。このようにクレアの想像力もまた深く事実根ざしている。「困い込み」となって現出した農業革命に対するルービンの悲憤についてのスタンザにこういう個所がある。

But who can tell the anguish of his mind  
When reformations formidable foes  
Wi civil wars on natures peace combind  
& desolation struck her deadly blows  
As curst improvment gan his fields inclose (103)

ルービンの「想像力の眼」には、「農業改革を行う、恐ろしい敵ども」即ち新興中産階級や貴族などの支配階級の人々が、内乱を起す者達と結託し、「自然の平和」を破壊しようとしている。ルービンを育くみ、彼のアイデンティティを形造った自然のままの「彼の野原」を「呪われた改革」が困い込み始めた時、「荒廃」はその壊滅的打撃を《自然》に与えた。“desolation”は“to deprive of inhabitants”または“to devastate, lay waste; to make bare barren, or unfit for habitation” (OED) のことであり、ここでは自然のままの土地から森・野原・小川などを破壊し、そこに住む non-human life から生息環境を奪うことによって、それが住めなくすることを指す。これが産業革命と連動した農業革命が推進する「困い込み」の実態であった。かつて木樵は樹陰がツグミの歌でこだましていた様子を、耕夫は朝美しく白み始める頃低木のずんぐりした藪からモリヒバリの歌が聞えてきた様子を知っていた。ルービンもそれらが啼きながら舞い上るのを観察したが、今ではいなくなったことを

The thorns are gone the woodlarks song is hush  
Spring more resembles winter now than\* spring  
The shades are banishd all—the birds betook to wing (106) \*than

と嘆く。またそれまで村人の誰もが自由に通行できた森・谷間・藪の中の小径も、「困い込み」によって私有地化され、侵入禁止の立札が立った。困い込むことによって共有地を私有地として獲得



した支配階級の人々は「専制君主」と呼ばれる。彼らが「正義」をも「私利」(“self-interest”) のために濫用していたことはこう表現される。

Inclosure came & every path was stopt  
 Each tyrant fixt his sign were\* pads was found  
 To hint a trespass now who crossd the ground  
 Justice is made to speak as they command (107) \*where

この詩の終り近くで「囲い込み」のテーマが導入され、自己を哀れむ詩人自身が登場するようになると、Keithが指摘するように「クレアとルービンとの間の非常に重要な形式上の区別がはやけてくる。」<sup>14</sup> 「囲い込み」に関するラディカルな表現はルービンの感情と意見であるのか、それともクレア自身のものであるのかは判別し難い。しかし、この曖昧さにも拘らず、読者は、その語り口からして、この表現を作者の声として聞くであろう。だが、ルービンはクレアの分身だと考えられるならば、これをルービンの声として聞くことに問題があろうか。

共有地や荒蕪地は囲い込まれて私有地化されたが、この私有地はルービンにとって自然の事物が取り払われた「裸の風景」である。共有地に通じる小径が無くなったことが、貧しい労働者達から共有地での請権利(例えばそこに自由に出入りし、家畜に草を食ませたり、薪用の枯枝を拾ったりすること)を奪ったことにルービンは憤る。

The haunts of freedom cowherds wattld bower  
 & shepherds huts & trees that tow [e]red high  
 & spreading thorns that turnd a summer shower  
 All captives lost & past to sad oppresions power (110)

下層階級の人々が自由に出入りできた共有地、牛飼いが小枝を編んで作った小屋、羊飼いの小屋、高く聳える木立、夏のにわか雨を避けるサンザシの木も「囲い込み」となって現れた「非道な圧制の力」によって「捕虜」となり、消滅した。「囲い込み」以後、ルービンには「絵のように美しい」(“picturesque”) と感じられていた自然の事物は破壊され、「神聖で」(“sacred” 109) はなくなり、「神の輝き」(“glories” 109)<sup>15</sup> を失った。「囲い込み」を企てる者達は「彼らの根こそぎにする鋤と同じくらい下劣な雑種野郎の田舎者(教養のない者)」(“mongrel clowns low as their rooting plough” 108) であり、誤った利己心ゆえに英国が誇る《自由》を尊ぶ精神をうたった国法を蔑み、私利を目論む「彼ら自身の法」に効力をもたせる。そのため、「渡り鳥のように英国の自由は飛び去ってしまい」(“Like emigrating bird thy (England’s) freedoms flown” 108)、貧しい民衆は多大な損失を被った。今やどこの村社会においても「専制君主達」または「教区の王様達」(“parish kings” 108) が許可するままに「教区の奴隷達」は生きていかざるをえなかった。<sup>16</sup> “mongrel clowns” の“clown”は“A man without refinement or culture; an ignorant, rude, uncouth, ill-bred man” (OED) の意であるが、それは利己心に囚われた人々に向けられたラディカルな風刺といえよう。また「囲い込みを企てた恥知らずは物の良し悪しが分らぬ者だ」(“& tasteless was the wretch who thy (enclosure’s) existance pland” 107) における、“lacking in discrimination, or in critical discernment and appreciation” (OED) の意である“tasteless”についても同じことがいえよう。

慣習的諸権利を奪われた貧しい人々を代弁するクレア<sup>50</sup>は「政治的にラディカルな詩人」(“a politically radical poet”)であるという印象を受けた出版者や庇護者達は、彼に詩行におけるラディカルな表現を削除させようとした。彼らはクレアを沈黙させることで結局民衆を沈黙させようとしたのだとLucasはいう。<sup>51</sup>

ルービンによって「囲い込み」以前有機的であり、階級の「差異」はあっても人々の「分断」は無かったと想定される村社会は、利己心に駆られた圧迫者と被圧迫者の区別がはっきりしてくるにつれ、「19世紀がその出現を見ることになっていた種類の、我々が今住んでいる有機的というよりはむしろ集塊状の社会」<sup>52</sup>へと変化しつつあった。「囲い込み」についてのクレアの声が最も大きく聞こえるスタンザを見てみよう。

Ye fields ye scenes so dear to lubins eye  
 Ye meadow blooms ye pasture flowers farwell  
 Ye banishd trees ye make me deeply sigh  
 Inclosure came & all your glories fell  
 Een the old oak that crownd yon rifld dell  
 Whose age had made it sacred to the view  
 Not long was left his childerns\* fate to tell  
 Where *ignorance & wealth* their course pursue  
 Each tree must tumble down—old 'lea close oak' adieu (109) \*children's

(イタリックは筆者)

政府の《自由放任》政策に擁護された「利己心」の追求は産業革命の完成期(1810年頃)に白熱した。農業革命は、衛生と医学の進歩に伴い増大した国民人口と、工場労働者として地方都市に流出したため減少した農村人口が要因となって、集約的農業と耕地拡大による穀物増産を目指した。だがこのことは、20世紀末の我々がグローバルな環境破壊や人間とnonhuman lifeの共生を解決せざるをえない最重要課題として抱えていることとは全く無関係という訳ではなからう。それはこのような課題の端緒が引用文の最後の二行、「無知と富が自らの道を進むところでは／すべての木は倒れねばならない」の中に象徴されているからである。「無知」が横行し、人々が「富」を、即ち経済的繁栄を今のような形で追求する限り、この課題は深刻化するばかりである。ルービンのいう《自然》についての「無知」は、《自然》を自分の「情感を映す鏡」<sup>53</sup>と考え、それ自体よりも自己あるいは精神の働きを重んじ、主観的な、人間中心主義的な見方に偏り過ぎたため生じた結果を暗示しているのではないのか。自然についての知識へのルービンの情熱は「識別力のある眼」(“discerning eye”)を養うが、自然についての「無知」は「識別力のない眼」(“undiscerning eye”)を生むのである。《自然》を、精神との関係においてではなく、それ自体において重視していることがnonhuman lifeの叙述をユニークなものにしている。その二つの例を見てみよう。

There once was brooks sweet wimpering down the vale  
 The brooks no more—king cup & daiseys fled  
 Their last falln tree the naked moors bewail  
 & scarce a bush is left around to tell the mournful tale (104)

Yon flaggy tufts & many a rushy nott  
 Existing still in spite of spade & plough  
 As seemly fond & loath to leave the spot  
 Tells where was once the green — brown fallows now (105)

104スタンザでは、かつて「明るい衣服をまとっていた」(“clothed gay”111)風景、即ち谷間を快い瀬音をたてながら流れ下る小川の岸辺にキンボウゲやヒナギクが咲き、低木の茂みや木立があった風景が今ではすべての「衣服」を剥ぎ取られ、「裸になった荒蕪地」は最後まで残った一本の木が伐採された時これを嘆き悲しんだ。この悲しい行き事を後世に語り伝える茂みさえほとんど残されなかった。また105スタンザでは、踏鋤と鋤を使つての「囲い込み」が行われたにも拘らず生き残り、「明らかにその場所を大変気に入っていて、そこを立ち去るのを嫌がっている」葦や藺の群生は、今では休閒地となっているが、かつては共有地であった場所を教えてくれる。“fled”・“bewail”・“tell”・“fond and loath to leave”という語(句)に見られる、nonhuman lifeの叙述における擬人法は単にルービンとクレアの個人的思想または感情のみを語るための手段として用いられているのではない。それは《自然》の側に立ったところから生じる擬人法であり、このレトリックによってnonhuman lifeの声を作者が代弁しているのである。このことは《自然》自体への深い関心があったはじめて可能なことである。《自然》についての詳細な知識と深い理解が対象を容易に理想化することを妨げているという特徴をもつ擬人法がここに見られる。「囲い込み」が下層階級の人々から共有地における継承されてきた慣習的諸権利と自由を奪い、彼らのそれまでの「個性」(“selfhood”)やアイデンティティ<sup>54</sup>の喪失をもたらした、と同時にnonhuman lifeからも生存の権利と自由を奪ったことが、これら二つの引用文においてもこのような擬人法という手法を用いて見事に表現されている。

## (6)

主に“joy”・“artless”・“fancy”といった用語を重点的に考察し、かつ語り手としての詩人自身の思想や感情を視野に入れながら、VMにおけるルービン像に光を当てることを試みてきた。とくに“fancy”にまつわるリアリズム、《自然》自体への注意と優しさ、《自然》についての知識欲、nonhuman lifeへの畏敬の念、民衆文化への志向、農業労働者への共感、過熱するself-interestを問題視すること、「囲い込み」のもたらす“home”の喪失感、人間とnonhuman lifeの共生などの多様なテーマはクレア自身が並はづれて幅広い関心と未来を先取りした洞察力をもっていたことを如実に物語っている。これらのテーマは翌年1822年に着手した長編風刺詩*The Parish*や成熟の一つの頂点を示す*The Shepherd's Calendar* (1827年出版) *The Rural Muse* (1835年出版)において更に発展することになり、後のほとんどすべての彼の成功している詩のテーマの萌芽が既にこのVMの中に読みとれるといっても過言ではない。KeithはVMについて、「クレアの観点が特別興味深い」ばかりではなく、この詩のテーマが包括的であることがこの詩を重要なものにしておりと評価する。<sup>55</sup> またM. Storeyは、この詩における社会観の形成に向つての彼の意識の進展は*The Shepherd's Calendar*の先駆をなす点で重要であるという。これに続く次のようなStoreyの一文ほど、VMの特質を簡潔に言い表わしている評言は他に見出し難いであろう。

In the long poem 'The Village Minstrel' that headed the 1821 collection Clare had, with some success, been able to place his response to the natural world in a wider context which embraced the whole village community.<sup>56</sup>

## 注

- 1 John Barrell, *The Idea of Landscape and the Sense of Place 1730-1840: An Approach to the Poetry of John Clare* (Cambridge U.P., 1972), p.173.
- 2 Mark Storey, *The Poetry of John Clare: A Critical Introduction* (Macmillan, 1874), p.5.
- 3 Johanne Clare, *John Clare and the Bounds of Circumstance* (McGill-Queen's U.P., 1987), p.87.
- 4 Ibid., p.87.
- 5 J. M. Todd, *In Adam's Garden: A Study of John Clare's Pre-Asylum Poetry* (University of Florida Press, 1973), p.12.
- 6 E. Robinson and D. Powell eds., *The Early Poems of John Clare 1804-1822* (Oxford U. P. 1989), p.xix.
- 7 W. J. Keith, *The Poetry of Nature: Rural Perspectives in Poetry from Wordsworth to the Present* (University of Toronto Press, 1980), p.47.
- 8 See Mark Storey ed., *Clare The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, 1973), pp.137-8.
- 9 E. Robinson ed., *John Clare's Autobiographical Writings* (Oxford U. P., 1983), p.106.
- 10 テキストは E. Robinson and D. Powell eds., *The Early Poems of John Clare 1804-1822 Volume II* (Oxford English Texts)を使用した。VMの引用文はすべてこの版に拠り、その末尾の( )内のアラビア数字はスタンザに付けられた番号である。
- 11 Edmund Blunden, *Keats's Publisher: A Memoir of John Taylor* (Clifton: Augustus M. Kelley Publishers, 1975), p.194.
- 12 See John Lucas, *England and Englishness: Ideas of Nationhood in English Poetry 1688-1900* (London: Hogarth Press, 1990), p.146.
- 13 See Johanne Clare, p.111.
- 14 Ibid., p.136.
- 15 See Juliet Sychrava, *Schiller to Derrida: Idealism in Aesthetics* (Cambridge U. P., 1989), p.203.
- 16 Sychrava は *Schiller to Derrida* の中で次のような斬新かつ啓発的な見解を述べている。

Thus when Lindenberger says that Clare 'keeps primarily to visual impressions' whilst Wordsworth draws 'the intellectual from the visual,' or when Lynd suggests that 'the record of his senses is more important than the record of his imagination,' one could counter this by arguing that Clare deliberately articulates the non-interference of the imagination or the intellect in the visually apprehended world. This is positive resistance to sentimentalism.

However, and more importantly, it can be argued that Clare is simply not concerned with these sentimental distinctions between self and world and that though he does contrast humanity with nature he — just as much and more than Wordsworth — can be read as cutting across that opposition. (p.206)

- 17 Sychrava, p.91.
- 18 「利己心」とクレアについては、拙稿『*The Parish* とクレアの社会批判』 (*Osaka Literary Review* No. XXIII), pp.65-71 参照。
- 19 See J. Barrell and J. Bull eds., *The Penguin Book of English Pastoral Verse* (Penguin Books, 1982), p.428.
- 20 Keith, p.50.
- 21 Ibid., p.50.
- 22 ‘Introduction’ to *The Early Poems of John Clare 1804-1822* Volume I, p. xix.
- 23 ... black neglect spreads one continual frown  
& threats her constant winter cold & chill (2)
- 24 Johanne Clareはクレアが「創造的想像力」(“creative imagination”)を言い表わすために fancy という18世紀の抽象名詞を用いていること、彼のfancyの「想像による超越的飛翔」は“little soul”・“little hope”・“lowly dream”・“mean and artless concerns”などが原因で不可能であることを指摘し、その詩的特質を‘negative capability’だと見做している。(p.91)
- 25 ... toil & slavery bears each fancy down  
That feign\* woud soar & sing ‘albeit ill’  
& forces him submit to fates controuling will (2) \*fain
- 26 Tim Chilcott はクレアのイメージ創造が、「事実を記録するのではなく、それに新しい解釈を施す観察の蒸留」(“that distillation of observation which did not record fact, but reinterpreted it”)を行う「彼の想像力という蒸留器の中での原対象物の複雑な排列や色付け」(“the complex arrangement and colouring of original object in the alembic of his imagination”)であると説明をしている。*A Publisher and His Circle: the life and work of John Taylor, Keats's publisher* (Routledge & Kegan Paul, 1972), pp.101-2 参照。
- 27 Johanne Clare, p.109.
- 28 村人と共に生活するルービンは、「彼ほど無知を装っている奇態かつ不作法な田舎者は見られなかった」(“A more uncouthly lout was hardly seen/Beneath the shroud of ignorance then (than) he” 43)と描写されるが、《無知》を装わねば村人達と共に生きていくことは辛いことである。「自然の秘密」、文学、絵画などの諸芸術に関する村人達のこれほどの《無知》も、本を購入したり、遠くへ旅行したりする経済的余裕のない彼らの生活を顧慮すれば、無理からぬことである。
- 29 Blunden, p.80.
- 30 Ibid., p.107.
- 31 社会に向けられたクレアのリアリズムと「一般的なロマン主義」の関係については、現在英国最高の詩人の一人であるSeamus Heaneyは次のように述べている。  
... it was the unique achievement of John Clare to make vocal the regional and particular, to achieve a buoyant and authentic lyric utterance at the meeting-point between social realism and conventional romanticism. His ‘Lament of Swordy Well’, printed here, must be one of the best poems of its century. (*Preoccupations*, New York: The Noonday Press, 1990, p.180)
- 32 Sidney Burris, *The Poetry of Resistance: Seamus Heaney and the Pastoral Tradition* (Ohio U. P., 1990), p.43.

- 33 Johanne Clare, p.110.
- 34 'Introduction' to *The Early Poems of John Clare 1804-1822*, p.xix.
- 35 Sidney Burrisによれば、口承文化として受け継がれてきた物語・民話・バラッド・ソングなどは「上流階級」("the polite")によって「下位文化」("subcultures")として冷遇されつつあったが、こうした民衆文化を「誇りに満ちた反抗的な態度で復活する」("resurrect ... with a note of defiant pride")という目的がクレアの意識にあったという。(See *The Poetry of Resistance*, pp.30, 56)
- 36 Sychrava, p.201.
- 37 "The commercial spirit was stronger than ever before and was symbolized, above all, by—Enclosure." See 'Introduction' to *The Oxford Authors: John Clare*, eds. E. Robinson and D. Powell, Oxford U. P., 1984, p.xvii.
- 38 See Lucas, p.155.
- 39 Roger Sale, *Closer to Home: Writers and Places in England, 1780-1830* (Harvard U. P., 1986), p.97.
- 40 梅棹忠夫・吉良竜夫編【生態学入門】(講談社学術文庫)、pp.32-33 参照。
- 41 'Introduction' to *The Early Poems of John Clare 1804-1822*, p.xiii.
- 42 自らの精神を表出する手段としての自然界に関連してChilcottは、初期の詩におけるクレアの「ことばの独創性」("the originality of his language")は「思想の独創性」("the originality of his thought")であると考察し、彼が「外界自体の中で思考する方法」を発見したことを次のように説明する。
- In his direct and almost primitive perception of the natural world, he found in Nature not a means of exemplifying thoughts which had come to him independently of the external world, but a way of thinking in itself. The objects of the countryside and his relationship with them made up the totality of his thought. (*A Publisher and His Circle*, pp.100-1)
- 43 See John Barrell, *Poetry, language, and politics* (Manchester U.P., 1988), pp.134-5.
- 44 128スタンザには「好奇心が強く、しきりに自然の秘密を探究したがる」("& curious natures secrets to explore")という類似の表現がある。
- 45 Todd はルービンの農業労働者への共感について次のようにいう。
- Where his attitude had been ambivalent toward the society which he had at once revered and yet constantly escaped from into nature, after the coming of enclosure it is one of total sympathy with the dispossessed peasants. (*In Adam's Garden*, p.14)
- 46 Lucas, p.140.
- 47 Keith, p.50.
- 48 キース・トマス著【人間と自然界—近代イギリスにおける自然観の変遷】(山内昶監訳、法政大学出版局、1989)には「野性の動物、鳥や魚は、万人にたいする神の贈物、《万人の所有物》だった」(原文では"Wild animals, birds and fish were God's gift to all men, 'everyone's property.'" という表現がある。(p.64)
- 49 時代は少し溯るけれども、階級社会における人間観をWilliam Blakeは次のように捉える。
- 'The Enquiry in England is not whether a Man has Talents and Genius, But whether he is Passive and Polite and a Virtuous Ass and Obedient to Noblemen's Opinions in Arts and Science. If he is, he is a good Man. If not, he must be starved.' (Lucas, p.140)
- 50 クレアの業績に関する Burrisの次の評価は注目すべきものである。
- The implicit resistance of his poetry does not simply register the voice of a single poet, but

‘The Village Minstrel’ におけるルービン像とクレア

the ruminations of an entire community. Clare emerges, for the modern reader, as the spokesman for this community, and because the patrons and publishers who encouraged his work often belonged to the financial establishment that destroyed the social and cultural dynamics of his village, he was forced to develop a poetry of a subtly subversive sophistication. Much of Clare's accomplishment lies in his founding of a poetic style that accurately captures the distinctive inflections of his community. (pp.43-44)

51 See Lucas, p.147.

52 ‘Introduction’ to *The Penguin Book of English Romantic Verse* (1978), ed. David Wright, p.xiii.

53 「とはいえ、過去の擬人論的な多くの通念をナチュラルリストたちはあっさり放棄したけれども、自然界を自分たちの反映だとみなす考え方をなかなか捨てきれない人々もいた。科学者がこうした古い見解を追放しようとしているときでさえ、自然が自分たちの気持や情感を映す鏡と考えるロマン派の詩人や旅人は、感傷的謬見という外皮を着せて、古い見解をこっそり立ち帰らせはじめていたからである。自然界は自律的であって、非人間的な用語でのみ理解されうるといことは、いぜんとしてほとんど理解不能に近い教義にほかならなかったのである。」キース・トマス、pp.128-9 参照。

54 “this heath made up my mind”というクレアの言葉を引き合いに出し、彼や村人達が知っている場所を「囲い込み」によって作り変えるということは、彼らの「知識」やアイデンティティを作り変えることであったという Barrell の指摘は示唆に富む。(See *Poetry, language, and politics*, p.119)

55 See Keith, p.48.

56 Storey, p.50.

## Lubin of 'The Village Minstrel' and Clare

Ren-ichi SUZUKI

In this paper some features of Clare's molding of Lubin, the hero of 'The Village Minstrel,' are sought after with regard to the words "joy," "artless," and "fancy," and at the same time Clare's thought and feeling are considered. The variety of themes of this long poem—realism that is characteristic of Lubin's fancy, his close attention to nature, his curiosity to know about nonhuman life, his love for the common people's culture, his sympathy with the agricultural labourer, wrong pursuit of self-interest, the loss of home (nest and den) brought about by enclosure, man's coexistence with nonhuman life—show how extensive Clare's interest is, and how far into the future he can see. These themes unfold themselves in the ensuing poems: *The Parish*, *The Shepherd's Calendar*, and *The Rural Muse*. We can see in 'The Village Minstrel' the original form of almost every theme of his later successful poems. W. J. Keith thinks that the themes of this poem are comprehensive, and therefore that it is an important poem. Mark Storey points out that Clare's consciousness of his community develops and shapes itself into a more definite view of society in this poem, and that this development is important in its anticipation of *The Shepherd's Calendar*. Storey's following comment may be one of those which express succinctly what are characteristics of 'The Village Minstrel': "In the long poem 'The Village Minstrel' that headed the 1821 collection Clare had, with some success, been able to place his response to the natural world in a wider context which embraced the whole village community."